様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年 ６ 月２５日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2008
課題番号：１８５３０５１３
研究課題名（和文）　「ことばの力」をはぐくむ幼児と絵本のかかわりに関する研究

研究課題名（英文）　The Effects of the children’s activities of picture-books in developing “the abilities of language”.

研究代表者
横山　真貴子（YOKOYAMA　MAKIKO）
奈良教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：６０３４６３０１

研究成果の概要：幼児の「ことばの力」と絵本とのかかわりの関連を検討した結果、家庭での絵本体験が豊かな幼児は、保育の場での絵本とのかかわりも多く、発揮される「ことばの力」も概して高かった。一方、家庭での絵本体験があまり豊かでない幼児の場合、両者との関連は見られなかった。また園での絵本体験は、家庭での絵本体験量を増やし、多様に変化させており、家庭の経験を補い、幼児と絵本との出会いを創り出す保育者の役割の大きさが指摘された。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	2,000,000	0	2,000,000
２００７年度	800,000	240,000	1,040,000
２００８年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	3,600,000	480,000	4,080,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・教育心理学
キーワード：ことばの力，幼児，絵本，保育，縦断研究，アクションリサーチ

１．研究開始当初の背景

(1)求められる「ことばの力」の育成：「言語力」の育成を目指し、平成17年７月、「文字・活字文化振興法」が成立した。「言語力」とは、読み書きだけでなく、伝える力や調べる力なども含めた「ことばの力」のことである。その育成がわが国の喫近の課題として挙げられ、その解決策の１つとして、読書、すなわち「本」を読むことが推進されている。

(2)絵本がはぐくむ「ことばの力」：近年わが国では、ブック・スタートをはじめ、乳児期早期からの絵本との出会いが一般的になりつつある。絵本は子どもが初めて出会う本である。絵本を読んでもらうこと、すなわち読み聞かせの効果については、これまで国内外において研究が蓄積されてきた。研究間でばらつきはあるものの、概して言語発達への有効性が指摘されている（Fletcher & Resse, 2005）。しかし従来の研究は、語彙力など狭義の読み書き能力への影響を明らかにしているに過ぎず、子どもが生活する場を対象に、コミュニケーション能力を含めた「ことばの力」を丁寧に調べた研究は未だ見られない。

それゆえ、絵本とのかかわりが、実際に子どもの「ことばの力」をどのようにはぐくむのか、経験知を越えた実証研究が求められる。

２．研究の目的

(1) 保育の場で発揮され，はぐくまれる幼児の「ことばの力」を捉える：本研究では，幼児期にはぐくむべき「ことばの力」として以下の７つの力を考えた（松川・横山, 2005)。まず、読み書きの前提としての①「聞く力」と②「話す力」、次に①②の力を基に自分の言いたいことを聞き手にしっかりと③「伝える力」、そして幼児期後半になるとその萌芽が見られる④「読む力」や⑤「書く力」、および本を使って⑥「調べる力」、さらに⑦「自己を調整する力」である。本研究の目的は、保育場面でのこの７つの「ことばの力」の発揮と育ちを、絵本とのかかわりから捉えることである。その際、家庭での絵本とのかかわりとの関連も検討する。

(2)アクション・リサーチとして保育者・保護者を支援する：本研究では、研究者が保育者と対話し、幼児の育ちと変化を共に振り返りながら研究を進めていく「アクション・リサーチ」(秋田･市川,2001)の手法を取る。保育への絵本の取り入れ方を始め、絵本環境の整備も保育者と共に行う。保護者に対しては、園との橋渡し、絵本とのかかわりに関する相談に応じる。

３．研究の方法

(1)研究協力者：2006年４月に幼稚園の３歳児クラスに入園した幼児24名（男女各12名）と保護者及び担任保育者。なお、家庭と園での絵本体験については、2007年度４月入園の２年保育児も含めた（合計58名：男児27名、女児31名）。

(2)調査対象児の抽出：「ことばの力」の発揮と育ちを３年間縦断的に検討するため、３歳児の１学期終了時、以下の手続きで調査対象児を抽出した。

①家庭での読み聞かせ経験の調査：１学期終了時、保護者に対して「家庭での読み聞かせに関するアンケート」を実施した。

②保育の場での読み聞かせ経験の調査：園での幼児の絵本とのかかわりの観察を１学期間、実施した。

①②の結果を踏まえ、保育者と相談の上、主に家庭での絵本体験をもとに、絵本体験の豊かな幼児４名（男児１名、女児３名）とあまり経験のない幼児４名（男児３名、女児１名）を選出した。

(3)絵本体験

①保育場面　(a)観察：06年４月～09年３月まで、登園時から降園時までの観察を計99回実施した。絵本体験として、「保育者のクラス集団への読み聞かせ」（実施頻度・読まれた絵本）と「保育室の絵本コーナー」（設置絵本･幼児が自発的に読む活動）を取り上げ、観察を行うと共に、分析を加えた。

(b)保育者への面接：観察後随時、また毎学期終了時に、観察記録をもとに保育者へのインタビューを実施した。

②家庭　家庭での絵本体験に関するアンケートを06年７月（23名、回収率100.0%）、07年７月（27名、回収率45.8%）、09年３月（35名、回収率60.3%）に実施した。

(4)ことばの力

①研究者がみる「ことばの力」：対象児８名について、以下の日常の保育場面の観察から「ことばの力」について捉えた。(a)一斉活動においてクラスの友だちの前で話す場面：①聞く力、②話す力、③伝える力、(b)絵本コーナー等での絵本とのかかわり：④読む力、⑥調べる力、(c)筆記具をもって描く活動（文字に限定しない）：⑤書く力、(d)遊び場面でのいざこざ等：⑦自己を調整する力。

②保育者の捉える「ことばの力」：日常の保育を通して、７つの力を保育者がいかに捉えているか、対象児８名について学期末の面接で問うた.

③テストが測る「ことばの力」:「おはなしづくり」、「ひらがなの読み書き」調査を２学期に実施した。

４．研究成果

ここでは、(1)絵本体験、(2)ことばの力、(3)総括：本研究の意義と今後の展望の３点から、本研究の研究成果をまとめる。

(1)絵本体験　①家庭での絵本体験：３年間の縦断的な質問紙調査の主な結果は、以下の３点にまとめられる.

(a)絵本とかかわる体験量は、加齢に伴い減少する（図１、図２参照）：３歳児に比べ、５歳児は絵本を読んでもらう頻度（図１）も、ひとりで絵本を読む頻度（図２）も減少していた。

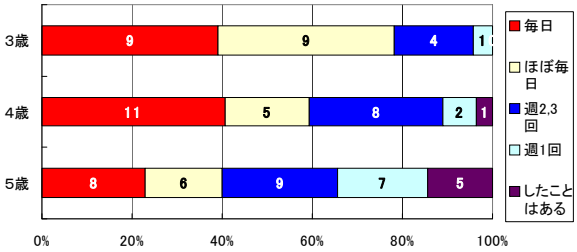

図１　家庭での読み聞かせ頻度

注）グラフ内の数値は人数を示す。

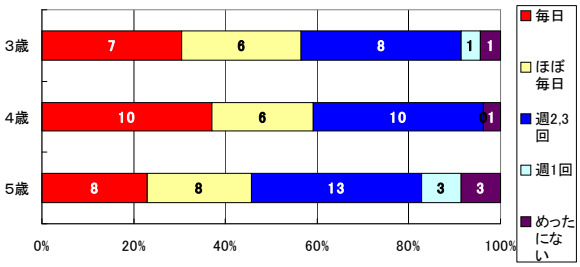

図２　家庭でのひとり読み頻度

(b)読む絵本の種類は、加齢に伴い、「物語絵本」中心から、「調べる」「遊ぶ」絵本へと多様化する（図３参照）：５歳児では、「折り紙・工作」といった製作のための「調べる絵本」や「クイズ」や「おもちゃ」のように遊べる絵本が顕著に増えていた。

発達的な変化をみると、３歳児では、園から持ち帰る「月刊絵本」（物語絵本）が全体の９割を超える家庭で読まれていた。その他、「日常生活絵本」「昔話」「通信教育」が６割を超え、「物語絵本」が中心となっていた。

４歳児では３歳同様、「月刊絵本」が９割を超え、次いで「昔話」が８割を超えていた。また、「昔話」「クイズ」「文字・数」「しつけ」の伸びが大きく、３歳児に比べ、読まれる絵本の種類が多様化していることが明らかになった。

５歳児になると、全般的に読まれる比率は４歳児に比べ低くなっていた。しかし、「折り紙・工作」「クイズ」の伸びが顕著であり、６割以上の家庭で読まれていた。

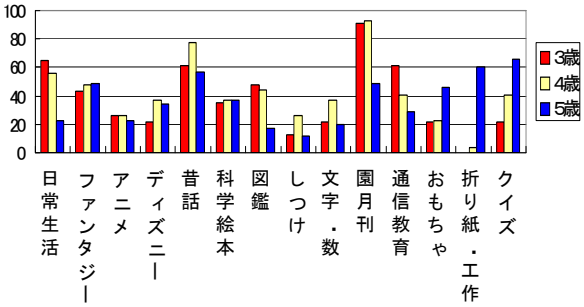

図３ 家庭で読む絵本の種類（%）

(c)園が家庭と絵本を結び、出会いを広げる役割を担う：園での絵本の出会いが、家庭での絵本との出会いを増やし、広げ、さらに幼児の絵本好意度を高めていた。

３歳児の保護者に対する質問紙では、入園後の家庭での絵本体験の変化を問うたが、「読む回数が増えた」が 69.6%、絵本の種類が「増えた」60.9%、「変化した」が 17.4%であった。５歳児では、入園当時と比較して、子どもの絵本好意度が変化したか否かを問うた。その結果、57.1%が「より好きになった」と答え、その理由（自由記述）として、半数以上が「園での貸出により絵本と触れる機会が増えた」「保育者の読み聞かせの効果」などを挙げていた。

②保育場面での絵本体験：(a)保育者のクラス集団への読み聞かせ　「実施頻度」（図４参照）は、加齢に伴い減少する傾向が見られた。４，５歳児では、特に３学期の実施頻度が低くなっていた。なお、協力園では、５歳進級時にクラス替えを行い、担任保育者も変わるため、図４のグラフの折れ線は連続させていない。

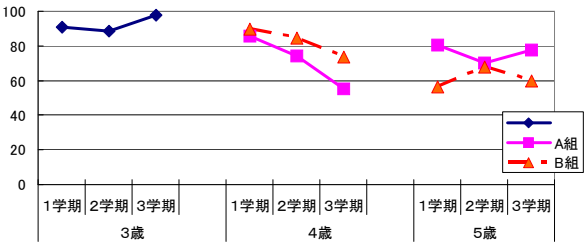

図４　集団への読み聞かせの実施頻度（%）

「読まれた絵本」を見てみると、いずれの年齢においても共通して「行事・季節」と関連する絵本が読まれていた。

年齢による変化も顕著に見られ、３歳入園時は幼児の日常生活を描いた「生活絵本」がシリーズ（『ノンタン』『パオちゃん』）で読まれていた。保育者は、入園当初は家庭との連続性を重視し、家庭でもよく読まれる絵本を意図的に読んでいた。２学期以降では「行事・季節」と関連する絵本が中心となり、他のシリーズ絵本（『タンタン』『ねずみくん』）も読まれた。

４歳児になると、４月当初は３歳児の４月同様、「生活絵本」のシリーズが読まれていた。新入園児を迎えて、家庭との連続性を意図してのことだった。幼児が園生活に慣れ始める５月になると、「昆虫を主人公にした物語絵本」や「科学絵本」、「おばけの絵本」など、絵本の種類が多様になった。２学期になると「行事・季節」との関連絵本が主となり、３学期以降は「昔話」の絵本が読まれるようになった。このように４歳児は、絵本の種類が広がる時期であった。

５歳児の１、２学期は、多様な「物語絵本」（シリーズ『わんぱくだん』など、「行事・季節」、昔話）が主に読まれた。「物語絵本」の内容も、モチーフの繰り返しではなく、起承転結があり、物語性のある比較的長い絵本が多くなった。一方で、「科学絵本」や「クイズ絵本」も読まれ、保育者が読む絵本の種類は４歳児よりもさらに広がった。３学期になると、「文字（あいうえお）」に関わる絵本が目立つようになり、物語絵本では小学校への入学や友だちを意識した内容のものが増えた。

(b)保育室の絵本コーナー：コーナーの本立てへの「設置絵本」は、保育者がクラスで読んだ絵本は必ず本立てに入れるようにしていたこともあり、ほぼ(a)保育者がクラス集団に読み聞かせた絵本の種類に対応していた。

「幼児が自発的に読む活動」については、「絵本」と「幼児」に着目して分析を行った。まず、幼児が自発的に手に取る「絵本」（表１，２参照）は、３，４歳児ではその７割近くは、保育者がクラス集団で読んだ絵本だった。表１は、観察日に絵本コーナーの絵本を手に

した幼児の延べ人数と手にした絵本の冊数、および手にした絵本の内、保育者が集団で読んだ絵本の冊数とその比率（既読絵本率）を示したものである。

表１　３，４歳児が自発的によむ絵本

		のべ人数	冊数	既読絵本数（冊）	既読絵本率（%）
3歳児（33日間）		288	406	270	66.5
4歳児	A組（15日間）	105	144	94	65.3
	B組（14日間）	98	112	77	68.8
	合 計	203	256	171	66.8

５歳児になると、特に２学期以降、絵本の種類によって手に取る絵本の既読率が変わった。表２は、１クラスの５歳児が２学期の観察日（11 日間）に手に取った１日の平均絵本数と既読絵本数、および既読率である。これを見ると、物語絵本では保育者がクラスで読んだ絵本の既読率が非常に高いが、科学絵本（クイズ絵本も含む）では、低いことが分かる。

表２　１クラスの５歳児がよむ１日平均絵本数

	物語絵本	科学絵本	合計
絵本数（冊）	3.5	7.3	10.8
既読絵本数（冊）	3.1	2.9	6.0
既読率（%）	88.6	40.0	55.6

以上より、幼児と絵本のかかわりを生む上で、保育者が非常に重要な役割を果たしていることが指摘される。絵本を本立てに並べているだけでは、幼児はなかなか手に取らない。幼児が手にし、よみたいと思う絵本は、保育者が自分達に読んでくれた絵本である。幼児と絵本を結ぶのは、保育者なのである。

次に、「幼児」に着目し、「家庭での絵本体験と園での自発的に絵本をよむ活動の関連」を調べた。その結果、３歳児ではやや家庭での絵本体験との関連が見られた（園で絵本を読む活動の多い幼児の半数［4/８名］が家庭での絵本体験が豊かな幼児）が、４，５歳児では、関連が見られなかった。家庭で絵本体験が豊かな幼児が必ずしも、園で絵本を手に取る頻度が高いわけではなく、それよりも、園生活の流れや（例えば、お弁当や製作等で行動が早く、活動の変わり目に時間的な猶予が多い幼児）や友だちとの関わり（遊びの中になかなか入っていけない幼児）との関連が強く見られた。

(2)ことばの力

本研究では、８名の調査対象児の「ことばの力」を７つの力から捉え、①研究者、②保育者、③テストの３つの観点から評定し、家庭と園での絵本体験との関連をみた。その結果、家庭での絵本体験（好意度・頻度）は、必ずしも園での絵本体験と対応せず、「ことばの力」との関連も見られなかった。

家庭での絵本体験が豊かな幼児４名の内、女児３名は、園においても３年間を通して、絵本と関わる頻度が高かった。しかし、家庭の絵本体験があまり豊かでない幼児４名の内、男児３名は、園で絵本とかかわることが少なくはなかった。幼児全体と比較すると、絵本との関わりが低いグループには含まれなかったのである。この結果から、幼児は、環境が違えば、絵本とのかかわり方も異なることが指摘される。園での絵本環境の重要性が明らかになった。

「ことばの力」との関連では、家庭での絵本体験が豊かな幼児４名(女児 A,B,C,男児 D)は、３つの観点からの７つの「ことばの力」の評定において、３年間を通して、ほぼ高い評価を得た。

「聞く力」「話す力」「伝える力」では、特に女児２名（A,B）は、園生活のあらゆる活動場面で、活発に発言し、クラスでの話し合いなど、場面を牽引する存在であった。他の２名（女児 C,男児 D）も、話の内容をよく理解し、全体の場での口数は多くはないものの、的確なコメントをする幼児として、研究者も保育者も捉えた幼児であった。

「読む力」「書く力」では、４人ともひらがなの習得が早く、４歳児の段階でほぼ読みは獲得しており、５歳児では書きもほぼ習得していた。生活場面での力をみると、５歳では、いずれの幼児も絵本コーナーの絵本を苦なく、すらすらと読む姿が見られ、「読む力」の高さが確認された。「書く力」では、特に女児 A は、「おてがみ」や絵を含め、かく（書く・描く）活動に従事することが多く、５歳児の２学期末には複数の文章を綴ったサンタクロースへの手紙を書いている。他の女児 B,C も、書く活動へ従事する姿が頻繁に見られ、濁音、半濁音を含む「おてがみ」を友達に宛てて書いていた。このように、生活場面での力の高さも確認された。

「自己を調整する力」では、女児 A、男児 D は、友達からの信頼が厚いと保育者が評定しており、自己を調整しながら、他者との関係を展開させる力があることがうかがえた。ただし、女児 C には、自分の意見を曲げない頑ななところが見られ、柔軟な自己の調整ができているとは言い難かった。「自己調整力」については、絵本体験との関連よりも、個人の性格の反映が大きかった。

一方、家庭での絵本体験が豊かではない幼児４名（女児 E、男児 F,G,H）について、３年間の間に幼児の発達、成長が見られたこともあり、いずれの幼児についても「ことばの

力」が低いとは評定されなかった。特に男児Hは、３歳児当初、口数は多く、難しい単語も使用するが、場面に応じて「話す力」が弱いと保育者、研究者も評価していた。しかし、その成長ぶりは著しく、５歳児の２学期には、クラス全体の話し合いの場で、保育者がしてほしい期待する発言をHがするなど、話を聞き、状況を把握して話すといった、「伝える力」が獲得されていることがうかがえた。

「読む力」「書く力」に関しても、この４名が特に獲得が遅いといった傾向は見られなかった。特に男児Gは、４歳児で読み書きとも習得し、生活場面では、５歳児の２学期には、けんかをした友達に「おてがみ(文字)」で謝ると様子も見られた。女児Eも、園で絵本と関わることは少ないものの、かく活動には女児の友達といっしょに頻繁に従事しており、獲得の遅れは見られなかった。

「自己を統制する力」に関しても、男児G,Hは３歳児では、周囲の状況にかかわらず、自分の思いのままに行動したり（G：保育室に集まる場面で戸外に飛び出す)、自分の思いが達成されないとすぐにめそめそと泣く（H)など、弱さを見せていた。しかし、５歳児になると、先に見たように、周囲の状況を見ながら発言したり（H)、友達との関係を修復するなど（G)、著しい成長が見られた。

このように、家庭と園での絵本体験と「ことばの力」の明らかな関連は見られなかった。家庭での絵本体験が豊かな幼児に関しては、高い「ことばの力」が確認されたが、家庭での体験が豊かでない幼児に関しては、幼稚園３年間の成長が大きく、「ことばの力」との関連は見られなかった。

(3)総括：本研究の意義と今後の展望

①本研究の意義　最も大きな意義は、幼児と絵本との出会いを作り、「ことばの力」をはぐくむ上で、保育者の役割は非常に大きいことを明らかにした点である。

保育者の役割を、家庭での絵本体験との関連で捉えると、幼稚園入園後、家庭で絵本を読む頻度が増加し、読む絵本の種類が増えたり、変化したことが保護者への質問紙調査から明らかになった。

園での絵本体験では、幼児が絵本コーナーで手に取る絵本の７割は保育者がクラス集団で読み聞かせした絵本であった。

「ことばの力」の観点から見ると、家庭での絵本体験の豊かな幼児は、園で発揮する「ことばの力」も高かった。しかし、家庭の絵本体験があまり豊かでない幼児の場合は、必ずしも絵本体験と「ことばの力」が対応していなかった。３年間の「ことばの力」の発達や成長が著しい幼児もいた。このことから、絵本体験を含め、園でどのような経験を保育者が意図し、重ねていくかによって、幼児の「ことばの力」の育ちが変わっていくことが示唆される幼児の「ことばの力」をはぐくむために、どのような活動を重ねていくことが必要なのかは、今回の研究からは明らかにすることはできなかった。しかし、保育者の果たす役割の重要性は確認された。

なお、この結果について、保育者に向けて発信することが重要だと考え、現在までに計９件、幼稚園教員の研修等で報告・講義している（次項「５．[その他]」参照)。

②今後の展望　幼児期に培われた「ことばの力」が小学校入学以降、どのように育まれるのか。現在、絵本（本）がはぐくむ「ことばの力」を発達的に捉えるために、本研究の調査対象となった幼児が入学した小学校で、引き続き縦断研究を展開中である（平成21～23年度科学研究費補助金（基盤研究（C)）課題番号21530690、研究課題名「絵本とのかかわりから捉える幼児期から小学校低学年期の子どもの「ことばの力」)。絵本体験がいかに読書体験につながり、「ことばの力」がはぐくまれていくのか、子どもが生活する場から描き出したいと考えている。また、本研究で明らかになった「保育者の役割」の視点を新たに加え、「教師の支援・指導」の観点からも研究を展開している。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕（計８件）

①横山真貴子　３歳児の絵本体験：家庭と幼稚園で出会う絵本　日本発達心理学会第18回大会　2007年３月15日　大宮ソニックシティ（埼玉）

②横山真貴子　３歳児の絵本体験：家庭と幼稚園で出会う絵本（２）　日本教育心理学会第49回総会　2007年９月15日　文教大学越谷キャンパス（埼玉）

③横山真貴子　３歳児の絵本体験：家庭と幼稚園で出会う絵本（３）　日本発達心理学会第19回大会　2008年３月21日　大阪国際会議場（グランキューブ大阪）

④横山真貴子　４歳児の絵本体験：家庭と幼稚園で出会う絵本　日本保育学会第61回大会　2008年５月17日　名古屋市立大学山の畑キャンパス（名古屋）

⑤横山真貴子　４歳児の絵本体験：家庭と幼稚園で出会う絵本（２）　日本教育心理学会第50回総会　2008年10月12日　東京学芸大学（東京）

⑥横山真貴子　４歳児の絵本体験：家庭と幼稚園で出会う絵本（３）　日本乳幼児教育学会第18回総会　2008年11月29日　大阪キリスト教短期大学（大阪）

⑦横山真貴子　５歳児の絵本体験：家庭と幼稚園で出会う絵本（１）　日本発達心理学

会第 20 回大会　平成 2009 年３月 23 日　日本女子大学（東京）
⑧横山真貴子　５歳児の絵本体験：家庭と幼稚園で出会う絵本（２）　日本保育学会第 62 回大会　2009 年５月 16 日　千葉大学（千葉）

〔図書〕（計１件）
①横山真貴子　光生館 「保育内容 言葉　第６章 文字との出会い」（秋田喜代美・野口隆子編著）2009 年，83-97.

〔その他〕（計９件）
・学会シンポジウム話題提供者（計１件）
①横山真貴子　「絵本とのかかわりから乳幼児期のことばの育ちを考える」　日本保育学会第 62 回大会準備委員会企画シンポジウムⅢ「子どもとことば：今、子どもの側にたち言葉の育ちを考える」シンポジスト 2009 年５月 16 日　千葉大学（千葉）

・幼稚園教員研修および講演・講義（計８件）
①横山真貴子　「幼稚園における絵本の読み聞かせについて：幼稚園ならではの読み聞かせの意義を考える」　和歌山市立教育研究所専門研修講座Ⅰ「幼稚園教育①」講義 2008年７月22日　和歌山市立教育研究所（和歌山）
②横山真貴子　「幼児の言葉を豊かにするために」　西宮市幼児教育研究会「言葉」部会 講演　2008 年８月１日　西宮市立門戸幼稚園（西宮）
③横山真貴子　「ことばの力が育つ保育：絵本を通してことばの力を育てる」　西宮市幼稚園新任教育保育実技研修　講義 2009 年１月９日　西宮市立子育て総合センター（西宮）
④横山真貴子　「幼児期から低学年期の発達における絵本の役割」　近畿地区国立大学附属学校園「国語」部会 講演　2009 年１月 27 日　奈良教育大学付属小学校（奈良）
⑤横山真貴子　「保育実践における絵本の意義と絵本の読みあい演習」講義　奈良市教員研修モデルカリキュラム開発プログラム「幼保統合の現職研修のためのモデルカリキュラム開発」　2009 年５月 30 日　奈良教育大学（奈良）
⑥横山真貴子　「幼児の言葉をはぐくむ教師の役割」　保育技術専門Ⅰ講座・新規採用者研修「幼稚園２」講座　講義・実習　2009 年６月４日　京都府総合教育センター（京都）
⑦横山真貴子　「保育と子どもの言葉の発達」　奈良市幼稚園教育領域別研修講座(1) 講義・演習　2009 年６月 17 日　あすなら（奈良）
⑧横山真貴子　「ことばを育む保育を考える」　奈良教育大学附属幼稚園第 12 回幼児教育セミナー 講演　2009 年６月 27 日　奈良教育大学附属幼稚園（奈良）

６．研究組織
(1)研究代表者
横山　真貴子(YOKOYAMA　MAKIKO)
奈良教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：６０３４６３０１